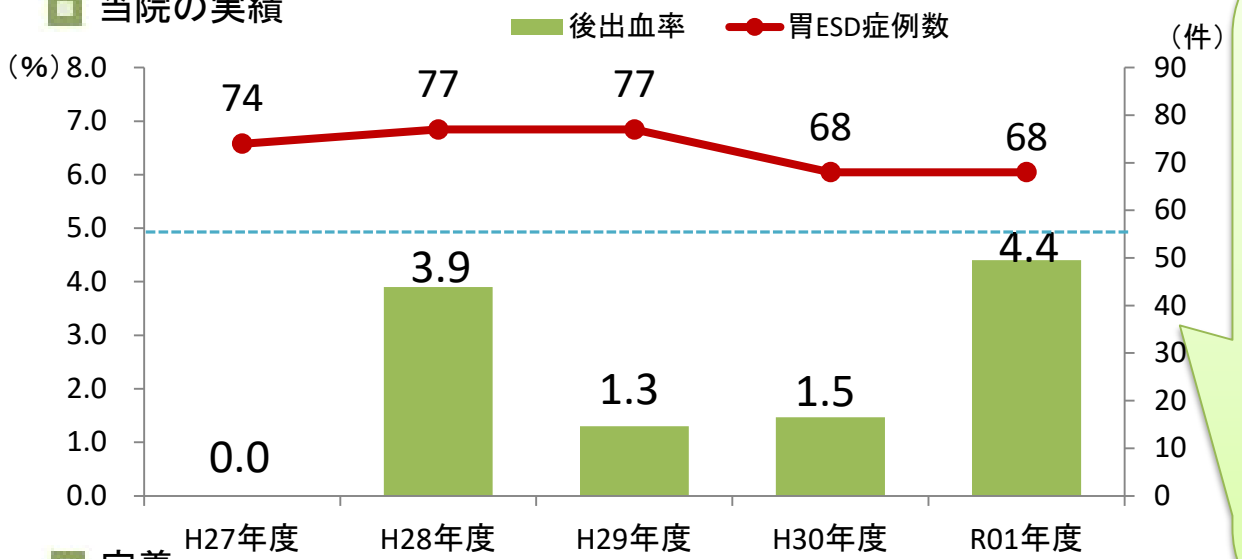
光学医療診療部　：
早期胃癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）術後の後出血率

解説：outcome指標

内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）は臓器温存したまま早期の消化器癌を根治切除し得る大変優れた技術ですが、医療者側の技術的要因もしくは患者さん側の病態的要因により、一定の率で後出血が発症します。後出血の発症率を下げることが患者さんへの負担を軽減し、医療の質を上げるためのひとつの指標となると考えています。

当院の実績



≪自己点検評価≫

ESD後の消化管出血率は全国平均5%であり、特に抗血栓薬内服症例は8-10%程度と報告されています。全国平均より低いものの、令和元年度では3例（4.4%）に後出血を認めました。3例中2例が抗血栓薬内服されており、出血高リスク症例でした。

今後、特に高リスク症例では念入りに予防処置及び密なフォローアップを行うと共に、強力な酸分泌抑制効果を示す薬剤を使用することで後出血の対策を行います。

定義

後出血率を、内視鏡的胃粘膜下層剥離術（ESD）症例総数における後出血（術後24時間以降に内視鏡的止血術もしくは輸血療法が必要となったもの）症例の割合と定義する。

算式

分子：後出血が発症した症例数
分母：胃ESD施行症例総数

参照文献・学会ガイドライン等

胃癌に対するESD/EMRガイドライン2014（日本消化器内視鏡学会、日本胃癌学会）

滋賀医科大学医学部附属病院
SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE HOSPITAL